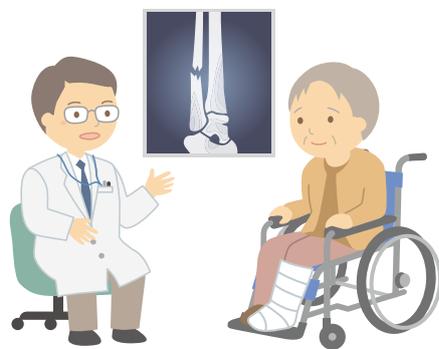




骨軟部腫瘍

整形外科 医長 稲谷 弘幸



整形外科では骨折や捻挫、背骨や四肢の痛みやしびれを診るほか、骨軟部腫瘍という、骨、脂肪、神経、筋肉、腱などに行ける腫瘍にも対応します。骨軟部腫瘍にも良性和悪性のものがあり、良性腫瘍は原則として体の他の部位に転移しないのに対して、悪性腫瘍は転移をして生命に関わることがあります。頻度としては多くないものの、早期診断がより良い結果につながるため、体にコブやしこりが出てきた場合は受診することをお勧めします。

良性の骨腫瘍は20種類以上あります。内軟骨腫や単純性骨のう腫は、どの年代でも見つかり、手足の骨の中にできてレントゲンで偶然発見されることが多いです。骨軟骨腫は、10歳代で、四肢の骨に隆起して見つかることが多いです。良性の骨腫瘍は、症状がなければ治療を要さないことも多いですが、腫瘍の存在により強度が弱くなったところで骨折（病的骨折）した場合やしそうな場合、診断がはつきりしない場合や、痛みなどの症状が出た場合には手術が必要になります。良性的軟部腫瘍も20種類以上あります。脂肪腫が多く、特に中高年で、皮下に柔らかい腫瘤を触れて見つかります。神経鞘腫も腫瘤を触れて見つかることが多く、

特に痛みやしびれを生じるものは手術による摘出が選択されます。

悪性の骨軟部腫瘍は、発生した部位が骨や軟部組織であれば肉腫と呼ばれ、骨肉腫、脂肪肉腫などがあります。痛みなどの症状がないからと放置して大きくなるまで受診されることが多く、手術により皮膚、筋肉や神経、血管と一緒に大きく切除することになるため術後の機能が低下するばかりか、受診が早ければ防ぐことのできた転移を生じる可能性があります。

手術や化学療法、放射線療法などの研究や技術の進歩により、患肢切断が必要になることは少なくなり、感染症などの合併症の発生率の低下、合併症に対する治療法の進歩、生存率の向上がもたらされていきますが、治療の出発点は患者さんの受診からであり、早期の受診がより良い結果につながることを心に留めておいてください。

診断はレントゲンやCT、MRIといった画像診断に加え、必要に応じて針生検や切開生検をして腫瘍の一部を採取し、顕微鏡を使った病理診断で確認します。

脂肪腫が多く、特に中高年で、皮下に柔らかい腫瘤を触れて見つかります。神経鞘腫も腫瘤を触れて見つかることが多く、